

考える力を育てる教育

田中マリア (筑波大学/道徳教育学)

小さな哲学者たち

(原題: Ce n'est que un débu)

- ◆ 種別: DVD ビデオ (ドキュメンタリー)
- ◆ 監督: ジャン=ピエール・ポッツィ&ピエール・バルジェ
- ◆ 製作年: 2010 年
- ◆ 製作国: フランス
- ◆ 発売元: ファントム・フィルム
- ◆ 販売元: アミューズソフト
- ◆ 税込価格: 3,990 円
- ◆ 時間: 本編 103 分
- ◆ 音声: フランス語
- ◆ 字幕: 日本語



© Ciel de Paris production 2010

あらすじ

フランス、パリ近郊の ZEP (Zone d'éducation prioritaire 優先的教育地区) にあるジャック・ブリヴェール幼稚園で、2007 年から 2 年間行われた Philosophie (哲学) の授業の様子を撮影したドキュメンタリー映画。Atelier (アトリエ) と呼ばれるこのクラスでは、先生と子ども達が輪になって座り、月に数回ロウソクに火を灯して哲学をする。子ども達はこのアトリエで少しずつ考えることの楽しさに目覚めていく。

シーン再現 (ラスト 5 分)

<卒園が近づき、アトリエも終わろうとしているなかでの子ども達の感想より>

「幼稚園を卒園して小学校に入ったら哲学の授業がなくなって、みんな考えられなくなる」「来年はここにはいないけど、ぼくは哲学やりたい。哲学をやりたいのは考えるのが好きだから」「みんなと一緒にじゃなくても考え続ける?」「考え続けるよ。だってパパやママと哲学するから。それにロウソクもつけるから」「おわり」「まだよ」「おわりさ」「違う、来年の 9 月に…」「小学校で哲学はやらない」「大きくなれば私たちと同じよ。哲学の授業があるし、そこで考えるようになるのよ」「お砂場でアビとアディークと私とルイーズとレアと話した。最初は 3 人で話していた。死と愛について話をしたの」

Chapter

1. オープニング / 2'30
2. アトリエの開始 / 6'05
3. 子どもとは? / 6'10
4. リーダーとは? / 4'15
5. 友達とは? 恋人とは? / 8'53
6. 頭がいいとは? / 3'07
7. 恐怖とは? / 4'15
8. 死とは? / 2'05
9. 愛とは? 結婚とは? / 11'43
10. 誰かが死んだら? / 10'16
11. 違いとは? / 7'53
12. 貧しさとは? / 8'53
13. 自由とは? / 15'58
14. アトリエの終わり / 4'44
15. エンディング / 3'50

今日、「考える力」の育成は日本でも重要な教育課題の一つとなっている。しかし、映像の中の子ども達をみると本質的なテーマについて深く掘り下げていこうとする傾向性はすでに子ども達の中にあるのだということに改めて気づかされる。ある男の子は「哲学をするってどういうこと？」と聞かれ、一生懸命、頭の中に浮かんだイメージを表現しようと言葉を探したあと、思いついたように、小さな手を口にあて何かを吐き出すようなジェスチャーをしながら「Sortir (外に出す)！」とそれを表現した。哲学ときくと大学生でも身構えてしまう人が多いが、映像の中の子ども達は実によくテーマにそって自分の考えを率直に語っている。

一方で、大人たちの会話からは、子ども達の中にある可能性を引き出すためには、本当に多くの人たちの配慮と時間が必要であるということも伝わってくる。アトリエを担当するパスカリーヌ先生は毎回、人間にとって重要なテーマについてとりあげ、子ども達の思考を妨げないように慎重に言葉を選びながら絶妙なタイミングで言葉を投げかける。「友達の好きと恋人の好きは違うの?」「大人は子どもより賢い?」「子どもは自由じゃない?」。子ども達は一生懸命、頭を働かせ、思い浮かんだものを外に出そうとする。パスカリーヌ先生はそれをじっと待ち、耳を傾け、時には突拍子のない言葉がでてきても上手に受け止め、より深く掘り下げられるよう手助けをする。「そのことパパやママと話したよ」と言いながら話す子ども達の答えの質の高さで親も協力してくれていることが分かる。こうしたやり取りを一年近く繰り返すことでようやく少しずつ子どもたちの中に変化がみられるようになってくるのである。

だが、このような試みを軌道に乗せるのは容易なことではない。パスカリーヌ先生は教員養成大学の修士号取得者であるが、冒頭のニュースキャスターのコメントにもあるように「はたして修士資格が子守をするだけの職員に必要なのか疑問」という声も少なくない。また、現実的には「うるさい」「静かにしなさい」という怒号がしつくと称して飛び交うことの方が多い。ラスト5分の子ども達の会話がまた切ない。「小学校で哲学はやらない」といった子どもに対し、別の子が答えた「大きくなれば私たちと同じよ。哲学の授業があるし、そこで考えるようになるのよ」というコメントは、大人が子ども達の考える機会や力を奪っておきながら子ども達の考える力の乏しさを憂え、子ども達の考える力の教育に力を注ぐという、なんともマッチポンプな教育の現状を浮き彫りにしている。なお、本映画の原題は、Ce n'est que un débu (それは、ほんのはじまりにすぎない) であり、この試みがほんの始めの一步にすぎないことを痛感させる題名となっている。

子どもの中にある可能性を奪わない教育を。

Information

※ ZEP: 社会的・経済的に恵まれない環境に置かれた子ども達の学力困難、格差解消をめざして、1981年フランスにおいて導入された予算配分上の優遇政策。

【公式HP】「小さな哲学者たち」<http://tetsugaku-movie.com/> (最終アクセス:2012/11/07)